醒井（さめがい）

米原市醒井

中山道に寄り添うように流れる地蔵川の清流

醒井宿（さめがいしゅく）は中山道六十九次のうち、61番目の宿場である。国道21号の喧騒がまるで嘘のような旧街道に沿って清流、地蔵川（じぞうがわ）が流れる。

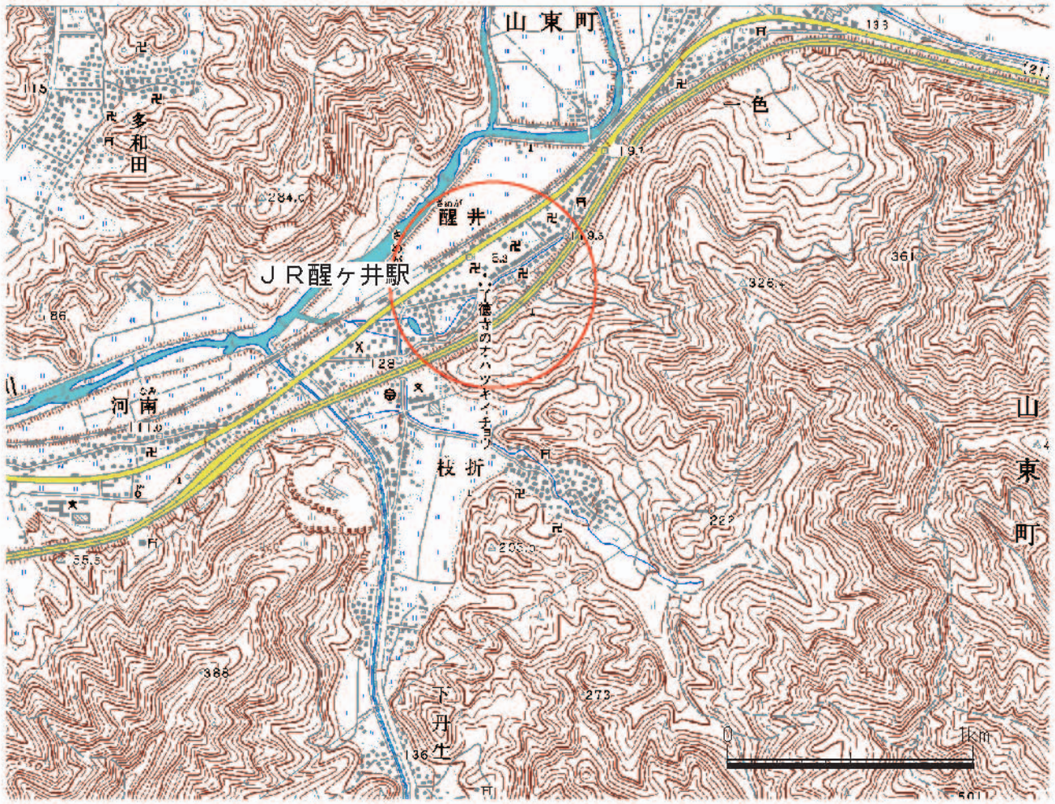
醒井は古代からの交通の要衝であり、『古事記』・『日本書紀』のヤマトタケル伝説に登場する「居醒泉（いざめのいずみ）」が、醒井の地名の由来であるといわれている。豊富な湧水は旅人の休憩場所として最適の条件であったことは間違いない。今も地蔵川の清らかな流れが町を潤しており、平成20年（2008）6月には、「平成の名水百選」（環境省）にも選ばれた。

周辺のみどころ

醒井といえば養鱒場（ようそんじょう）。霊仙山（りょうせんさん）山麓の鍾乳洞から湧き出る宗谷川の清水と河川敷を利用して、明治11年（1878）に琵琶湖固有のマスである「ビワマス」の増殖を目的とした日本初の県立孵化場である。現在ニジマス160万尾、アマゴ・イワナが58万尾を飼育。また、養鱒場を含む一帯は醒井渓谷（さめがいけいこく）として名勝に指定されている。

醒井宿の北東には県内最高峰の伊吹山（標高1,377m）が聳（そび）える。頂上付近の一帯は天然記念物伊吹山頂草原植物群落があり、初夏になると様々な高原植物を楽しむことができる。

昼も暗く幽玄な空気が漂う名勝醒井渓谷



[アクセス]

●JR東海道線醒ヶ井駅下車徒歩すぐ。

[もっと詳しく知りたいひとへの案内]
（関連文献／関連施設）

●秦石田・秋里籬島編集『近江名所図会』文化11年
●滋賀県教育委員会『中近世古道調査報告２ 中山道』平成８年

居醒の清水

醒　井

所在地　米原市醒井

地蔵川の湧水

地蔵川は加茂神社境内の湧水池「居醒清水」をはじめ、十王水、西行水といった湧水を水源とし、江戸時代後期の旅行ガイドブックともいうべき『近江名所図会』には、「醒井三水四石」として記されている。醒井の「三水」とは醒井の語源になった「居醒清水」・「十王水」・「西行水」を指し、「四石」は居醒の清水にある蟹に似た「蟹石」、ヤマトタケル伝説のある「鞍懸石」・「腰懸石」、そして源海寺の「影向石」を指している。

『古事記』・『日本書紀』によると、東征からの帰りにヤマトタケルは、伊吹山の荒ぶる神を退治に出掛けたが、戦い敗れ、発熱し正気を失うほどであったが、この泉まで来て清水で体毒を洗い流したところ、熱が下がり、気力も回復したと伝えられている。

江戸時代中期の幕臣である大田南畝（蜀山人）は、その著書『壬戌紀行』で、醒井の由来について触れるとともに、「…道の右に水のながるゝ音きよし。…醒井の水は古へより名高き所也。」と、その清流をたたえている。

清流がはぐくむもの

地蔵川は霊仙山の伏流水（湧水）によってできた川であることから、水温は年間を通じて14℃程度と安定している。近年、この清流をとくに有名にしたのが水中花「梅花藻」と湧水地にしか棲まない「針魚」である。

梅花藻はキンポウゲ科の水生多年草で清流でしか育たず、７～８月頃に梅の花に似た白い小花を咲かせることから、この名が付いた。夏の最盛期には直径1.5cm程の愛らしい花が一斉に川面から顔を出す。また、晩夏の地蔵川は、川沿いに植えられたサルスベリの花が落下して、梅花藻の白とサルスベリの紅で彩られ美しい。

ハリヨ（針魚）は日本および欧州・北米に分布する淡水魚の一種で、かつては広く分布していたが、現在では滋賀県東部と岐阜県西濃地方の平野部の湧水地のみで棲息が確認されている。何らかの要因で水域が失われたり、環境が悪化すると絶滅してしまう可能性がある。

そこで、滋賀県では平成20年に、ハリヨの棲息を保護して行くために地蔵川全域（居醒の清水から天野川合流点まで）を「地蔵川ハリヨ生息地保護区」として指定し、保護に努めている。

バイカモもハリヨも、どの段階から地蔵川で棲息していたかは確認できていないが、これら動植物の棲息が地蔵川の清流の指標となり、訪れる人々を和ませてくれていることにかわりはない。

また、地蔵川は宿場の人々の生活に溶け込んでおり、川端には各戸ごとの洗い場や、芋洗いの水車が設けられるなど、暮らしに共生した清水の情景を見ることができる。

清流に育まれたくらし。まさに「近江水の宝」である。

加茂神社からみた醒井宿（中央は中山道）

地蔵川と中山道

地蔵川沿いの洗い場